イネ縞葉枯病情報第１号

令和７年６月１９日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

西三河地域の一部地点で採取したヒメトビウンカの イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が高い

１　ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査の結果

５月中旬から下旬にかけて県内 21 地点のコムギほ場等からヒメトビウンカを採取し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査した結果、表のとおりとなりました。

21 地点の平均保毒虫率は 1.8%（平年値：4.0%）で、平年と比べやや低い状況でしたが、一部地点では保毒虫率が経済的被害水準である５%以上となりましたので、注意が必要です。

表 ヒメトビウンカの縞葉枯ウイルス保毒虫率
（令和７年５月採取の虫を簡易 ELISA 法により検定）

	調査地点	検定虫数（頭）	保毒虫数（頭）	保毒虫率（%）
弥富市	鍋田町	25	0	0.0
飛島村	新政成	11	0	0.0
長久手市		25	1	4.0
豊田市	田代町	25	0	0.0
	前林町	25	0	0.0
	中町	25	0	0.0
	和会町	25	0	0.0
	福受町	25	0	0.0
刈谷市	半城土町	25	3	12.0
安城市	里町	25	0	0.0
	赤松町	25	2	8.0
	榎前町	25	0	0.0
	高棚町	25	0	0.0
	寺領町	25	0	0.0
岡崎市	在家町	25	1	4.0
碧南市	縄手町	25	0	0.0
西尾市	小栗町	25	0	0.0
	一色町	25	0	0.0
	小焼野町	25	1	4.0
	和気町	25	1	4.0
豊川市	御津町広石	25	0	0.0
	計	511	9	1.8
				（平均）

図 イネ縞葉枯病（ゆうれい症状）

２　イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）（前ページの図）。また、穂が出すくんだり、不稔になったりすることにより減収します。

ヒメトビウンカは、幼虫で水田周辺のイネ科雑草等で越冬します。４月上旬頃に成虫になり、ムギ畑に飛来して一世代経過し、増殖します。その後、成虫が水田に移動し、保毒虫がイネにウイルスを感染させます。また、本ウイルスは経卵伝染するため、保毒虫は次世代もウイルスを保毒します。ヒメトビウンカの保毒虫率が５％以上となると、イネ縞葉枯病発病株率が 10％を超え、経済的な被害を与える可能性があります。

本県で栽培されている「あいちのこころ」、「あいちのかおりＳＢＬ」、「大地の風」、「ミネアサヒＳＢＬ」などは本病に抵抗性を有しますが、「コシヒカリ」などは感受性であるため、注意が必要です。

３　防除対策

抵抗性品種の作付けが少なく、ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施薬を実施していない地域や、不耕起Ｖ溝直播栽培で殺虫剤の種子塗抹を実施していない地域では、幼穂形成期までに、水田に侵入する成虫と次の世代の幼虫を対象とした本田防除を実施しましょう。なお、薬剤の選定は、今後の斑点米カメムシ類防除と同一薬剤の連用にならないように配慮しましょう。